

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 20日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520321

研究課題名（和文） ピエール・ジャケス・エリアスと20世紀ブルターニュの諸相

研究課題名（英文） Pierre-Jakez Hélias and the 20th century of Brittany

研究代表者

梁川 英俊 (YANAGAWA HIDETOSHI)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：20210289

研究成果の概要（和文）：

20世紀ブルターニュを代表する文学者・知識人であるピエール＝ジャケス・エリアスの全体像を、残された文献や映像資料、特にブルターニュ・オキシダント大学に所蔵されている「エリアス文庫」や、フランス国立視聴覚研究所アトランティック支部に保管されているエリアスが出演した50本以上のテレビやラジオ番組、さらには生前のエリアスを知る20人以上の親族や友人知人、研究者などへのインタビュー調査によって明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Pierre-Jakez Hélias was Brittany's most famous intellectual and literary figure of the 20th century. I have tried to gain the whole picture of his many activities through the numerous documents of the Hélias Collection kept at the University of Western Brittany, the more than 50 TV and radio programmes about him archived at INA Atlantique, and interviews with over 20 people ranging from his relatives to his friends and college professors.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ブルターニュ、ピエール＝ジャケス・エリアス、ブルトン語、ケルト、『誇り高き馬』、グザヴィエ・グラール、コルヌアイユ祭、インタビュー

1. 研究開始当初の背景

フランス北西部の半島地帯に位置するブルターニュに地方は、古来ブルトン語（ブレイス語）というフランス語とは異なるケルト系の言語を持ち、今日フランスでもっとも地域的アイデンティティーの自覚が強い地域として知られている。しかしそのアイデンテ

ィティーの起源は比較的新しく、19世紀にはじめて現れたと言ってよい。

応募者は90年代よりその起源について調査すべく、19世紀中葉に現れたブルターニュの民謡集『バルザス・ブレイス』を中心に研究を進め、毎年のようにこの地方に赴いて文献調査やフィールドワークを行い、多く

の研究成果を発表してきた。本研究はそのブルターニュ研究を、20世紀さらには現代へと発展させることを目的として着想されている。

ピエール・ジャケス・エリアスは20世紀のブルターニュを代表する文化人であり、主著である『誇り高き馬』によって世界的に知られている。しかしその研究はフランス（ブルターニュ）においても緒に就いたばかりであり、わが国においてはケルト関係の翻訳書やフランス民衆史関連の歴史書でその重要性が指摘されているほかは、応募者が2001年に発表した論文（《Merlin dans l'imaginaire breton depuis le XIXe siècle》in *IRIS*, Université Grenoble 3）を除いて、本格的な論述の対象となったことはない。本研究はその意味で先駆的な試みである。

2. 研究の目的

バス・ブルターニュ地方のブルトン語圏であるビグーデン村に生まれたピエール・ジャケス・エリアスは、ブルトン語を母語としたが、早くからブルトン語とフランス語の2言語を使用して、作家・詩人・劇作家・ジャーナリスト・民俗学者・ラジオ番組製作者・民話の収集家等として多方面で幅広く活動した。特に1975年に出版された『誇り高き馬』は、20世紀前半のブルターニュの農村社会を詳細に描いて大きな反響を呼び、50万部を超えるベストセラーになった。その一部はいくつかの言語に翻訳され、海外でも紹介されている。

エリアスはこの成功を機に、中央のメディアにも頻繁に登場し、また晩年には民話に題材を採った小説も出版して、ブルターニュのスポークスマンとしてフランスのみならず世界的に知られた。その一方で、彼のブルトン語やブルターニュ文化に対する姿勢は、生前から「後ろ向き」として批判の対象となり、とくにブルターニュの運動家のなかには、いまなおその業績に対してアンビヴァレントな態度をとる人が少なくない。

本研究は、そのエリアスの活動を、残された著作、ノートや手紙等の資料、映像、さらには関係者へのインタビューを通して検討し、以下の3点について明らかにすることを目的としている。

- ①エリアスの多面的な活動を調査・整理して、その全体像を明らかにする。
- ②同時代のブルターニュ運動（EMSAV）とエリアスの業績を比較して、その意義を明らかにする。
- ③ブルターニュにおけるエリアスの評価を調査・検討し、その背景を明らかにする。

上記の各点について、具体的な研究内容は

以下の通りである。

①に関しては、初期のブルトン語による著作、民話収集家／語り手としての活動、コルスアイユ祭における具体的な貢献等、エリアスのあまり知られていない側面にも焦点を当てる。

②については、その活動を20世紀前半に始まるブルターニュ運動との関連で対比的に論じ、とりわけ現代ブルトン語教育の父、ロバルス・エモンの活動とエリアスのそれを比較対照させながら、両者の思想信条の相違を検証する。

③については、生前、死後を問わず、エリアスに関して書かれた著作や新聞、雑誌等の記事を整理し、その評価について分析する。なかでも『誇り高き馬』への返答としてグザヴィエ・グラールが出版した『横倒しにされた馬』をきっかけに両者の間で始まった論争を追い、両者の立場や主張の相違を明らかにするとともに、そこで真に問われていたものは何かを考察する。

3. 研究の方法

3年間の研究期間において本研究の目的を達成するために、以下の3つの方法で研究を進める。

- ①パリのフランス国立図書館、レンヌ市立図書館、カンペール市立図書館、ブルターニュ・オキシダント大学ブルターニュ・ケルト研究センター（CRBC）の「エリアス文庫」（Fonds Pierre-Jakez Hélias）等における文献・資料の収集および調査。
- ②国立視聴覚資料センター（INA）レンヌ支部（INA atlantique）に保管されている、エリアスが出演したラジオやテレビ番組等の録音・録画資料等の調査。
- ③エリアスの遺族をはじめとする関係者へのインタビュー調査。

これらの方法によって、エリアスの多面的な活動を調査・整理して、その全体像を把握する。また、それを元に20世紀のブルターニュ運動におけるエリアスの業績の意義を明らかにし、ひいてはブルターニュにおけるエリアス批判の理由や背景を解明したい。

①の文献資料の調査において最も有益な資料を提供すると期待されるのが、プレストのブルターニュ・オキシダント大学のブルターニュ・ケルト研究センターに所蔵されている「エリアス文庫」である。同文庫はエリアスの死後、遺族が自宅に残された多種多様な文献・資料をまとめて寄贈したもので、さまざまな草稿やノート類、またエリアスに関する新聞や雑誌の記事の切り抜き等、本研究に益する資料が多数所蔵されている。

②の視聴覚資料については、エリアスがま

ラジオのパーソナリティーとしてブルターニュで知られるようになった事実からも明らかなように、彼の活動全体を理解する上で欠かすことのできない資料であり、現在INAのレンヌ支部に一元化されて整理が進められている。

③のインタビュー調査を行うのは、ブルターニュの現代史に関しては、活字になっていない部分も多く、また資料のみからでは脈絡がつかめない事柄もあり、オーラル・ヒストリーがしばしば大変有効な研究手段となるからである。特にエリアスのように著作のみにとどまらない活動を行った人物の場合、関係者の証言を得ることはほとんど不可欠である。エリアスの没後からすでに20年近く経ち、生前の姿を知る人たちの高齢化も進んでいる。その証言の収集が急がれるゆえんである。

4. 研究成果

平成22年度は、当初の計画通り、エリアスの多面的な活動を調査・整理することに重点を置いた。なかでもプレストのブルターニュ・オキシダントル大学に付属する「ブルターニュ・ケルト研究センター」には貴重な資料が多くあり、その調査に多くの時間を費やした。同センターには、エリアスの死後に遺族によって寄贈されたエリアスの草稿やノート類や書簡、新聞や雑誌の記事の切り抜き等の多くの資料が収められた「エリアス文庫」があり、目録を参考にその収蔵資料の内容を把握する一方で、その閲覧・複写を通して、著作のみからは知ることのできないエリアスの諸活動を具体的に知ることができた。また同センターに所蔵されているエリアス関連の蔵書や資料、なかでもエリアスをテーマとした未刊行の博士論文等の資料の閲覧は有益であった。

文献調査の傍ら、エリアスに関するインタビュー調査も積極的に行なった。特にエリアスの長女クローデット・エリアスには二度にわたって話を聞くことができた上、エリアスの遺品の一部である12冊の手帳のコピーを許可していただいた。

また生前のエリアスと多くの交流があったレンヌ大学名誉教授のフランシス・ファヴローや歌手で民謡研究者のヤン・ファンシュ・ケメネール、レンヌ大学教員のフランソワーズ・モルヴァン、ブルターニュ・オキシダントル大学教員のエリアス研究者ロナン・カルヴェスやマナイック・トマ、また欧州少数言語事務局フランス支部長のタンギ・ルアルン、その夫人でブルトン語学校「ディーワン」校長のアナ・ヴァリ・シャパランからも率直な意見を聞くことができた。さらにグーランのコンクールで出会ったブルトン語話者たちとの率直な対話も、エリアス像

を客観化する上で大変役に立った。

平成23年度は、プレストのブルターニュ・オキシダントル大学に付属する「ブルターニュ・ケルト研究センター」において、エリアスの草稿やノート類の調査に時間を費やす一方、特別な許可を得て国立視聴覚資料センターのレンヌ支部で、エリアスが出演したラジオやテレビ番組等の録音・録画を大量に視聴することができた。同センターに所蔵されている視聴覚資料は、質量ともに予想をはるかに上回るものがあり、その視聴によってエリアスのメディア人としての側面を具体的に知ることができた。

また前年に引き続き、エリアスの関係者へのインタビュー調査も積極的に行なった。なかでもブルトン語専門の出版社「エムグレオ・ブレイス」代表で、著名なブルトン語研究者でもあるファンシュ・ブルディック、ブルトン語の独自の正字法を生み出したプレスト大学名誉教授ファンシュ・モルヴァヌーの両氏からは貴重な話を聞くことができた。

平成23年度はまた、ブルターニュ以外の地域におけるエリアスの評価を知るために、ブルターニュと同様に言語復興運動の盛んなバスク地方に赴き、「バスク文化センター」代表を務めるパンチョア・エチャゴイアン氏等にインタビューを行ったほか、ボルドー在住のブルターニュの文化活動家数人に話を聞いた。

エリアスの長女クローデット・エリアス、プレスト大学教授ロナン・カルヴェス、レンヌ第2大学教授フランソワーズ・モルヴァンには、前年に続き変わらぬ協力をいただいた。歌手で民謡研究者でもあるヤン＝ファンシュ・ケメネールやレンヌ第2大学教授イヴ・ドフランスからは、調査全般に関わる貴重な助言を得た。

なおこの年のブルターニュにおける調査の過程では、エリアスを研究する日本人として、ブルターニュ地方の新聞である「テレグラム」に取り上げられたほか、同系列のTBOテレビのニュース番組にも出演した。

平成24年度は最終年であったので、インタビュー調査の総仕上げとして、本研究の重要な協力者であるエリアスの長女クローデット・エリアスに、生前のエリアスが特に信頼していた人物を、存命中の人物からピックアップしてもらい、インタビューを試みた。

まず、90年代にケルト文化圏のミュージシャンを結集させた『ケルトの遺産』をプロデュースし、現在はブルターニュ商工界の一大プロジェクト「プロデュイ・アン・ブルターニュ」(Produit en Bretagne)の代表を務めるジャケス・ベルナル氏をカンペールに訪ね、エリアスの写真に囲まれた事務所で、若い頃にエリアスから受けた影響を中心に、2時間にわたって話を聞いた。

また、エリアスの故郷のビグーデン地方で、エリアスの子供時代をよく知る従妹のマチルドと、彼女の幼馴染でもあるエリアス博物館の館長に話を聞いた。

最後に、エリアスがその晩年にとりわけ親密に交際した、写真家フェリックスおよびニコール・ルガレック夫妻を自宅に訪問し、特にプロゴフにおける原発建設をめぐる警察隊と住民との闘いを描いた映画『銃に立ち向かう石ころ』を監督したニコールから、それまで政治闘争とは無縁であったエリアスがこの闘争に関わった経緯について、多くの証言を得ることができた。

またクロードットの計らいで、エリアスが晩年に家族と過ごした自宅を訪れ、書斎や蔵書等を閲覧することができた。

さらにレンズでは、エリアスと直接的な関係はないが、ブルターニュの口承文化保存協会「ダステュム」(DASTUM)の本部を訪ね、ディレクターから同協会のシステムや運営の現状、問題点等などについて詳しく話を聞いた。

なお、調査の成果の一部は、日本ケルト学会で発表したほか、鹿児島大学の人文学科論集や日本ケルト学会の学会誌『ケルティック・フォーラム』に論文の形で掲載した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 梁川英俊、ピエール＝ジャケス・エリアス研究の現状について (2) (Actualité des études héliasiennes), 『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』(Cultural Science Reports of Kaogoshima University), No. 76, pp. 77-90 (2012). (査読無)

② 梁川英俊、ピエール＝ジャケス・エリアス研究の現状について (1) (Actualité des études héliasiennes), 『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』(Cultural Science Reports of Kaogoshima University), Vol. 75, pp. 113-134 (2012). (査読無)

[学会発表] (計2件)

① 梁川英俊、『誇り高き馬』以後のピエール＝ジャケス・エリアス — ブルターニュにおける批判を中心に、日本ケルト学会、2012年10月(鹿児島).

② 梁川英俊、ピエール＝ジャケス・エリアスの『誇り高き馬』について — 1970年代におけるその受容と評価を中心に、日本ケルト学会、2011年10月(中央大学(八王子)).

[図書] (計1件)

梁川英俊 (編著)、歌は地域を救えるか、三

元社(2013)、128頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梁川 英俊 (YANAGAWA HIDETOSHI)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：20210289